

日本の高等教育における BEVI 関連文献のスコーピングレビュー

永井敦

Scoping Review of the Literature on BEVI in Japanese Higher Education

Atsushi Nagai

This study provides a scoping review of the relevant literature on BEVI in Japanese higher education. Following the Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses (PRISMA-ScR) guidelines, 24 studies/reports were analyzed to identify current trends in the use of the BEVI instrument and research gaps. Finally, some future research recommendations are presented.

Keywords: *BEVI, scoping review, Japanese higher education*

キーワード: BEVI, スコーピングレビュー, 高等教育

1. はじめに

本稿は、現在 40 を超える国内高等教育機関で導入されている「信念・事象・価値尺度」(Beliefs, Events, and Values Inventory: BEVI) に関する既存の国内文献をレビューし、今後の実践及び研究の方向性について示唆を与えることを目指すものである。以下、まず方法を述べ、次に結果と考察を提示し、最後にいくつかの研究の方向性を示す。

2. 方法

2.1 スコーピングレビュー

代表的なレビューの手法として「ナラティブレビュー」や「システムティックレビュー」が挙げられる(友利・澤田・大野・高橋・沖田, 2020)。前者は従来の方法であり、総説や解説記事が相当する。そこでは、文献検索やデータ抽出の方法について明確な規定は無く、著者に一任される。後者はレビュー前に厳格なプロトコルを作成し、再現可能な形で文献の検索や選択を行う。そして最終的には得られた結果を質的に統合して要約を作成する¹。

スコーピングレビューは両手法の中間に位置し、事前にプロトコルをある程度作成するものの、システムティックレビューと比べても条件の緩い、幅広い知見を概観することを目的として行われる比較的新しい手法である(友利ほか, 2020)。本手法はナラティブレビューほど恣意的になることを防ぐ一方で、システムティックレビューでは明確にすることが難しい研究設問を扱う場合でも信頼性が担保されたレビューを可能にするとされる(沖田・廣瀬・長・高瀬・岸, 2021)。以下では、スコーピングレビュー実施の流れ(沖田ほか,

¹ システムティックレビューと対を成すものとして「メタアナリシス」と呼ばれる手法がある。前者が「質的な」統合を図るのに対して、後者は「量的な」統合を行う点で異なる(友利ら, 2020)。

2021; 友利ほか, 2020) に沿って本研究の方法を記述していく。

2.2 選択基準

本稿では、日本で BEVI の普及が広がりつつある中心的な場が高等教育機関であることから、レビュー対象文献は日本の高等教育機関での BEVI の利用を取り上げたものとする。知見の外観というレビューの目的をふまえ、対象は論述の体裁をとる文献に限る。また、BEVI について間接的にしか言及していないものは含めない。文献は BEVI-j (日本語版の BEVI) の完成年である 2016 年から本稿執筆時の 2022 年 9 月までに公表されたものを対象とする。

2.3 検索方法

文献の検索には、国内論文データベースである CiNii 及び J-STAGE を主な情報源として使用した。検索には「(高等教育 OR 大学) AND (BEVI OR “Beliefs, Events, and Values Inventory”)」及び「(Higher Education OR University) AND (BEVI OR “Beliefs, Events, and Values Inventory”)」の検索式を用いた。

2.4 文献選択

以上の検索ワードによるデータベース検索より、合計 134 の文献レコードが特定された。重複を除き、また、上述した選定基準をふまえて各文献の内容を確認したところ、最終的に 23 件の文献が以降の分析のために採用された。

2.5 データの抽出

レビューに含まれた各文献について、沖田ほか (2021) を参考にしつつ、以下 10 項目についてのデータを抽出して表 1 に整理した (文献内で情報が明確に提示されていない部分には網掛けをしている)。

- ・「著者」：文献の著者
- ・「出版年」：文献が出版された年
- ・「タイトル」：文献のタイトル (題目)
- ・「種類」：論文の種類
 - 理論型： BEVI の紹介、理論的な解説、あるいは概念的な議論に関わるもの
 - 実践型： 学習者の実際の BEVI データの報告と考察をとまなうもの
- ・「測定場面」： BEVI の測定が行われた場面
 - 派遣： 実渡航を伴う派遣プログラム
 - 受入： 実渡航を伴う受入プログラム
 - 科目： 通常の授業科目

オンライン： オンライン国際交流プログラム（COIL 型教育は COIL と付記）

専攻： 専攻プログラム（学科レベルでの測定も含む）

- ・「対象国」： プログラムや科目で関わりのある国
- ・「期間」： プログラムや科目の長さ
- ・「学年」： 参加学生の学年
- ・「所属」： 参加学生の所属学部・大学院
- ・「性別」： 参加学生の性別
- ・「N」： 実際に分析に使われた BEVI のデータ数

2.6 文献の分析

BEVI に関する国内の文献数が限られていることや、文献内で報告されている数値情報は、一般の実証研究に記載される統計情報とは性質が異なるため（BEVI は基準データに基づき、対象集団に関するパーセンタイル得点の平均値を出力するが、ローデータや標準偏差等の情報は手に入らない²⁾）、メタ分析のような統計的分析は行わず、表 1 に整理した文献情報について質的な考察を行う（この点はナラティブレビューと同様である）。

3. 結果と考察

3.1 BEVI に関する文献の推移と背景

まず、文献の出版数についての経年変化を確認しておく。BEVI についての文献は 2017 年の西谷（2017）を初出とし、2021 年まで漸増し、2022 年はやや減少している（図 1）。この推移について理解するために簡単に歴史を振り返る。まず、BEVI-j を作成されたのは 2016 年である（西谷, 2020）。同年には「留学の学習成果分析（BEVI-j）シンポジウム」が文部科学省後援で開催された。2018 年には、西谷元氏を中心として BEVI 普及の活動が精力的に行われた。広島大学の「平成 30 事業年度に係る業務の実績に関する報告書」によると、29 回もの BEVI ワークショップ（約 130 の大学・機関・企業が参加）が行われた。さらに、「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」が始まり、その成果測定に BEVI が採用されるなど BEVI 導入への機運の高まりも感じられた。BEVI はその後も 2021 年に文部科学省と外務省の後援による「海外留学の客観的効果測定 国際シンポジウム」で取り上げられ、国際教育夏季研究大会（SIIEJ）においてもワークショップが組まれるなど、プレゼンスを一層高めている³⁾。

²⁾ このデータアクセスの問題は BEVI の課題である。BEVI には Decile Profile というデータのばらつきを視覚的に把握する方法が実装されているが、より進んだ統計分析を行うためには、スケールスコアについての標準偏差の情報の提供が最低限望まれる（ローデータが手に入らない場合）。

³⁾ 西谷氏からの私信（2022 年 9 月 12 日）によれば、現在サブスクリプションをしている国内大学の数は 45

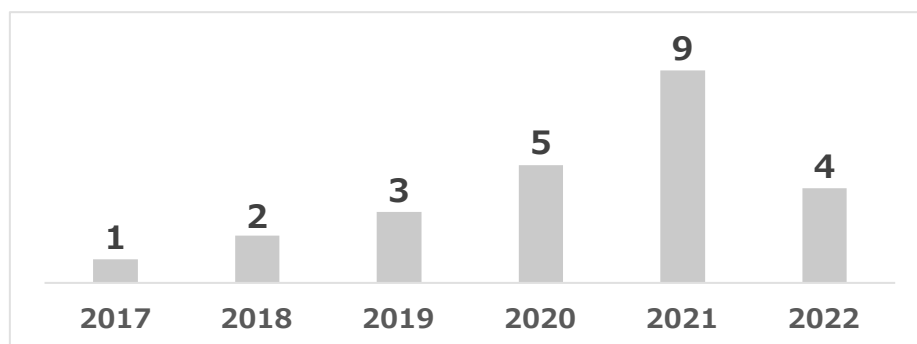


図1 BEVIについて文献の推移（2017-2022）

3.2 BEVIに関する文献の種類

レビューに含められた文献の種類は大きく「理論型」と「実践型」の2つに分けられる。今回分析した文献24件の内8件が理論型であり、16件が実践型であった。国内ですでにBEVI導入がかなり進んだことをふまえると、今後も実践型の文献が増加することが予想されるが、理論型の文献も同様に増えることが期待される。

3.3 測定場面

本稿では実践型の文献について、BEVIが実施された場面を5種類に区別した⁴。図2から明らかなように、オンライン国際交流型（COIL含む）の教育場面が最も多い。また、9件の文献の内5件がCOILの実践を報告したものである。BEVIが元々留学の効果測定の文脈で注目を浴びたことを思えば、派遣に関する文献が多いことも自然である。また、「留学の効果測定」は派遣プログラムと併せて語られることが通常であるため、受入学生のデータを報告した文献が少ないことも理解できる。最後に、BEVIが留学の文脈を離れ、通常科目や専攻プログラムに対して使用された興味深い例が観察される。今後は受入学生や科目・専攻プログラムを対象としてBEVIが実施された報告も増えることが期待される。

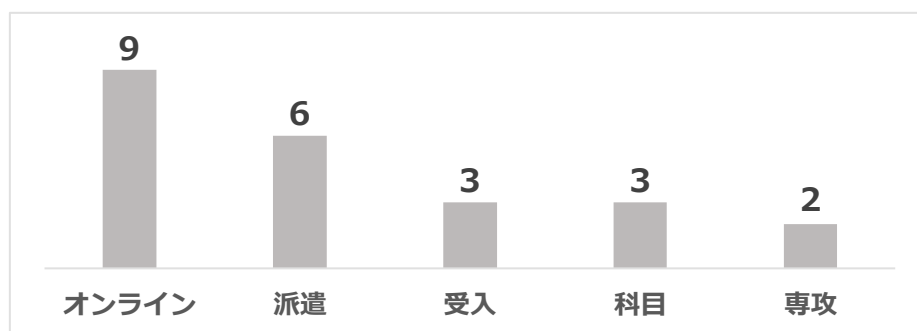


図2 測定場面別の文献数

あり、その他に約50の大学がトライアルに参加したという。

⁴ いくつかの文献においては、複数のカテゴリーにまたがるものがあるため、その場合は、漏れがないように両方のカテゴリーにカウントしている（以下、他のセクションでも同様に対応した）。

3.4 対象国

国別では情報がやや細かすぎるため、ここでは地域別に見ることとする。北米（米国）が6件と最も多い（図3）。次が東南アジア（カンボジア、タイ、シンガポール、フィリピン、ブルネイ・ダルサラーム）の5件で、オセアニア（豪州）が2件、欧州（アイルランド）と東アジア（韓国、台湾）は1件である。今後は、まだ報告されていない地域（例えば南米やアフリカなど）での事例についても実践報告が期待される。

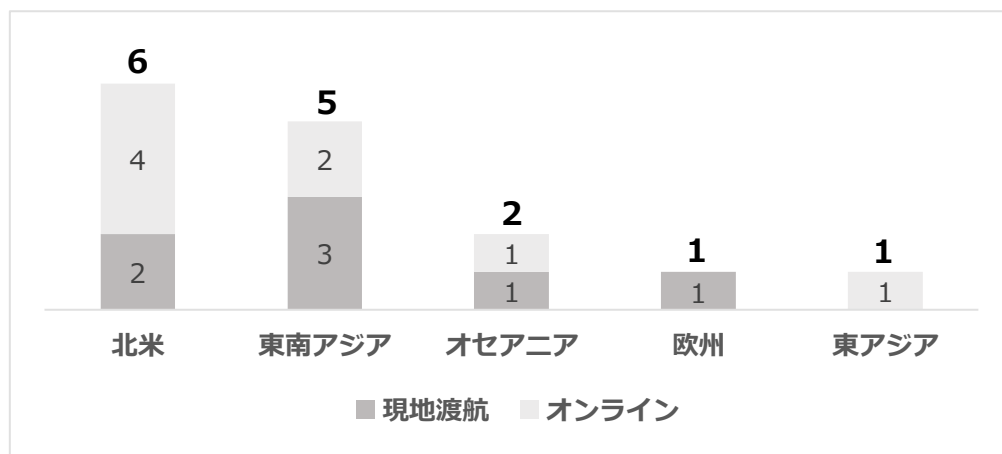


図3 対象国別の文献数

3.5 期間

教育的介入の期間別に文献をカウントしたところ、2週間から3週間のものが計8件と最も多かった（図4）⁵。次に3週間以上1カ月未満のものが4件である。なお、1か月以上のものは3件あるが、3カ月のプログラムを扱ったバイサウス・池田（2020）を除いて、いずれもCOIL型科目か通常科目を対象としたものである⁶。1週間以上2週間未満のものが2件で、最後に1週間未満のものが1件となっている。つまり、現在の文献は短期介入を扱うものがほとんどである。今後は中・長期の介入プログラムの効果測定に関する事例の報告が望まれる。他方で稲盛（2021）のように、1週間未満のプログラムの効果測定にBEVIを用いる事例も興味深い。実際、超短期プログラムでも高い教育効果を生み出せることを実証できれば、その知見がもたらす実用的価値は高いであろう。

⁵ ウィルソン・岩野（2021）は2つのCOIL科目の実践報告をしているが、その1つについては「週2回計30回の授業のうち、4回分の授業をフルに使い、補足のために4回分の一部を使った」（p.69）と説明している。週2回ということから2週間以上であることが推測され、それに加えて「4回分の一部」とあることから、ここでは2週間以上3週間未満のカテゴリーに分類した。

⁶ バイサウス・池田（2020）はCOILに渡航プログラムが加わったいわゆるCOIL Plusであるが、文献の強調点がCOILにあることから、ここでは「オンライン」にカウントした。

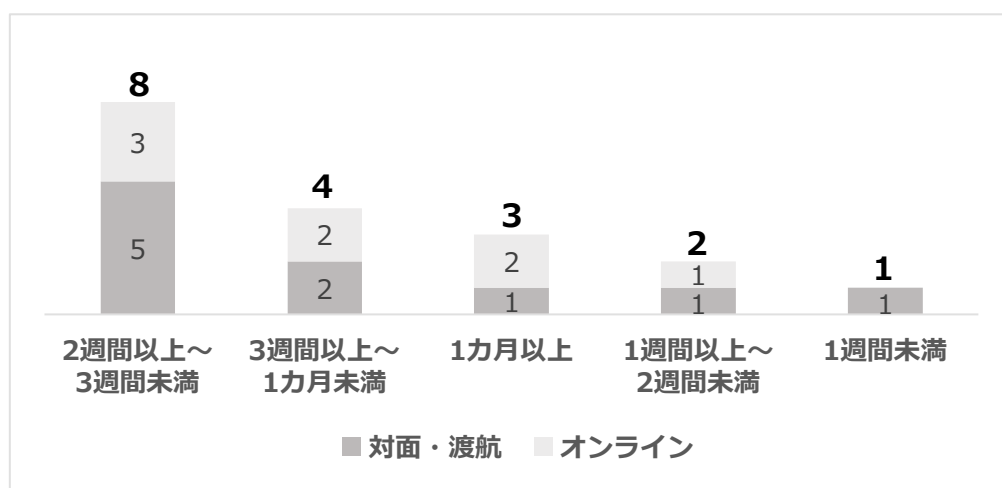


図4 介入期間別の文献数

3.6 学年・所属・性別・N

これらの項目については文献内で明確に報告されていないものも多く、傾向分析を行う意味があまり無いため、ここでは所感を述べるにとどめる。学年については多岐にわたり、所属についても人文社会科学系から理工系の学部の学生が混在している印象がある。学生の性別についても、学科の特徴の影響をもとづく文献である藤島・岩田（2022）を除けば、目立った差は無い。BEVI のデータ数についても 3～136 と幅広い。これらの項目（変数）について今後期待されることとして、まず、知見の共有を図るため、分析対象者について、できる限り正確なデータの報告を行うことが必要である。学年は学生個人の人間的成熟の度合いを反映する変数になり得るし、所属や専攻についても「文系学生」であるか「理系学生」であるかによって変化の傾向が異なると指摘されている（西谷, 2018; 植村・和田・田村・徳田, 2022）。性別では、男子学生と女子学生で BEVI 上での変化の様相が異なることが示されている（河内・植松, 2021; 蒙, 2021）。現段階では、量的統合を行うための十分な文献があるわけではないが、将来的に統計手法（例えばメタ回帰分析）を用いて各プログラムを横断的に分析し、どの要因が BEVI で測定された心理変化に影響を与えているかを解明するには、要因に関する情報が必要である。したがって、今後の BEVI データを用いた報告では、学習者の正確な情報が（もちろん個人情報保護への配慮をした上で）提示されることが望まれる。

3.7 分析された BEVI のスケール

本レビューを行う際に、文献の中で BEVI のどのスケールについての分析が報告されているかについても調査し、その結果を表 2 にまとめた。表の濃い網掛けは、文献の中で、当該スケールについての分析と解釈が提示されていることを示す。例えば、「スケール 15. 社会文化的オープンさ（Socio Cultural Openness）（文化、経済、教育、環境、ジェンダー/世界の関係、政治の幅広い行動、政策、慣習について進歩的/オープンである）」の数値が

上昇するという、START プログラムが目的としている効果も同時に生じている」（西谷, 2017, p.65, 下線部引用者）の場合がそれに相当する。この文の前段は事実的な記述であるが、後半はその事実がどういう意味を持つのか、分析者が解釈を付与している。一方、薄い網掛けは、当該スケールへの言及はあるものの、結果を記述するにとどまるものを示す。比較のため、同じ文献から引用する。例えば「スケール 3. 欲求の充足 (Needs fulfillment)」（経験や欲求や感情に対してオープン、自己や他者、広い世界に対する気遣い/思いやり）の値は、37 パーセンタイルから 43 パーセンタイルに上昇している」（西谷, 2017, p.62, 下線部引用者）では数値の変化が記述されているものの、解釈は特に提示されていない。

この基準のもとで文献を見た場合、全体的に見て、表の右側部分で濃い網掛けが多く、その中でもスケール 13 以降に濃い網掛けが多く観察される。これは、13 から 17 までのそれぞれのスケールが、国際教育が養成を目指すコンピテンスと関りが深いためである。例えば、東矢・當間 (2019, p.31) は「特にグローバル人材としてのスキル・考え方に関連するのは、領域 6 と 7 を形成するスケール 13 から 17 である」と述べている。しかし、Wandschneider, Pysarhik, Sternberger, Ma, Acheson, Baltensperger, Good, Brubaker, Baldwin, Nishitani, Wang, Reiweber & Hart (2015, p.187) が指摘するように、BEVI のいくつかのスケールにのみ焦点を当てることで、学習者が経験している複雑なプロセスを見失う可能性がある。よって、BEVI で分析を行う際は、原則として 17 のスケールに目を配り、総合的な解釈を生み出すことが望まれる。なお、経験に対する内省的質問項目 (Experiential Reflection Items) についても、ほぼ全ての文献で取り上げられていない⁷。BEVI はこの定性的な質問項目を入れることで、定量データと併せた「混合法」(mixed methods) による分析が可能になると強調するが (Beliefs, Events, and Values Inventory, 2022)、実態はスケールデータに基づく定量的な分析に偏っている。以上の現状をふまえ、今後はスケール 13~17 以外のスケールの考察も含めたデータ解釈を試みることや、学習者の経験に関する質的データについても積極的に収集する（これは BEVI 以外の方法であっても良い）ことが期待される。

4. 今後の研究の方向性（試論）

上述の議論は BEVI に関する既存の文献のマッピングに関わるものであった。ここでは、レビューの中で立ち現れてきた、いくつかの興味深い研究の方向性について言及する。

まず、清藤・橋本 (2020, 2021, 2022) による一連の実践報告である。彼らの研究は、いずれも同じ大学、同じプログラムを対象として継続的に行われている。清藤・橋本 (2020) はオンライン留学プログラムの BEVI データの分析を通じ、学修成果が限定的である理由

⁷ 稲森 (2021, p.188) でも短い「参加者コメント」が紹介されているが、それらが BEVI の質的項目のデータであるかどうかは明記されておらず、判断がつかなかったため、ここでは該当しないとした。

を、参加学生の異文化的レディネスの弱さと結びつけた。その知見をふまえ、清藤・橋本（2022）ではオンライン留学プログラムの開始前に異文化理解講座を提供した。事後測定にて、（下位群の）BEVI スコアが上昇したことから、「異文化理解の授業は元々そのことにあまり関心のなかった学生には効果的だったと考えられる」（p.58）と述べている。無論、これは実験室のような統制環境で行われた研究ではないため、厳密には因果関係を明らかにしたとは言えない。だが、データ収集場面を固定して教育実践を繰り返すことで、教員、学習者、学習環境といった要因をある程度自然に統制できる（Collins, 1992）。実際、この考え方を発展させた研究手法に「デザイン研究」（Design-Based Research）がある（鈴木・根本, 2013）。清藤らの実践に示唆されるように、BEVI による効果検証と実践の改善を繰り返すことで、有用な知見を生み出すことが可能になるだろう。

次に、河内・植松（2021）らによる、海外学修経験を通じたジェンダー観の変化に着目した研究である。河内らは、留学経験とジェンダー観の変化に関する先行研究をふまえ、フィリピンまたは米国に留学した学生のジェンダー観の変化を BEVI で測定した。スケール 14（ジェンダー的伝統主義/Gender Traditionalism）の事前と事後のデータによると、米国プログラムに参加した女性学生グループ以外の下位グループでは得点が下がっており、「ジェンダー伝統主義についての肯定的な変化が認められた」（p.11）。また、同論文では学生に半構造化インタビューを行い、ジェンダー観の変化について質的にも深く掘り下げている。河内らの研究の特色は、ジェンダー観という、国際教育の分野ではまだ新しい研究テーマに取り組んだことに加え、その測定尺度に、ジェンダー観を測定できる BEVI を選んだ点にある。さらに、留学プログラムの文脈をふまえると、ジェンダー観以外に、異文化理解やグローバル意識の面でのデータも実務的に重要になるが、BEVI はそれらの情報も提供できる。すなわち、研究及び教育目的と測定手段としての BEVI がうまく適合している。研究手法の面でも、BEVI の定量データに加えて、半構造化インタビューで定性データを得ており、混合法に基づく研究例として参考になる。このように、国際教育分野で測定される典型的なコンピテンスとは異なる側面で、学習者の変化を探る研究も今後期待できる。BEVI のスケールをふまえると、ジェンダー観以外には、例えば宗教観の変化を国際教育の文脈で探ることは、興味深い研究トピックになるであろう。

もう一つ興味深いアプローチに、大西（2021）の授業実践がある。大西は「政策ディベートと交渉論の基礎」という大学科目の教育効果の測定に BEVI を用いた。データ分析の対象は 6 名と限られているが、ディベートという授業の方法と BEVI の 17 のスケール上での学習者の変化について一つずつ分析が提示されている。例えば、スケール 12 の「意味の探求」（Meaning Quest）について、BEVI のスコアが上昇したことをふまえ、「授業ではディベート論題の内容を通じて政策の意味を問い、深く思索することを求めているので、この結果は好ましい」（p.104）と述べており、授業のねらいと BEVI スケール上での変化を

対応させた考察が興味深い。また、スケール 15 と 17 で BEVI スコアを上昇させることができたことから、「日本の大学人が海外留学に期待している教育効果の少なくとも一部は、国内でも十分に実現可能である」(p.105) と重要な指摘をしている。このように、通常の科目の教育効果の測定に BEVI を用いて授業改善を行う試みは新しく、興味深い。逆に BEVI のスケールで測定されているコンピテンスを意識しながら授業内容を構成することも可能だろう。また、大学教育の「内なる国際化」が叫ばれる中で、国際共修に大きな注目が集まっていることを考えると⁸、今後は国際共修科目の効果の測定に BEVI が使用される可能性も高い。

もちろんこれらの研究以外にも BEVI を活用できる重要な研究テーマはあるが、上記の 3 つの研究の方向性はいずれも、BEVI を用いた実践・研究のための新たな可能性を開くものであり、本稿において、特に言及するに値すると判断した。

5. おわりに

本稿は、BEVI が国内高等教育機関に普及し、BEVI についての理論的及び実践的な文献が増えつつある中、既存の文献状況についてスコーピングレビューの手法を用いて概観し、今後積極的に報告が求められる情報を指摘するとともに、いくつかの研究の方向性を示唆した。スコーピングレビューはシステマティックレビューの前段階として位置づけられることもあり (Munn, Peters, Stern, Tufanaru, McArthur, Aromataris, 2018)、今後さらに BEVI に関する知見が蓄積されれば、いずれはシステマティックレビューあるいはメタアナリシスを行うことで、より体系的に知の統合を行うことができるだろう。しかし、そのためには本稿で指摘したように、学習者の心理変化に影響を与える可能性がある要因については、正確な情報 (学年、性別、所属等) の提供が望まれる。このためには、BEVI を用いた実践報告のためのガイドライン作りも有効であろう。国内では BEVI に関する文献の絶対数は限られており、研究も萌芽的な段階である。一方で、すでに興味深い研究の報告も現われつつあるため、今後の研究の発展に期待したい。

なお、本レビューは文献の外観を目的としていたことや紙幅の都合もあり、個々の研究の内容や成果について詳細な検討を行うことはできなかった。これについては別稿を用意する予定である。本レビューが、国内高等教育機関で BEVI に関わる方々にとって、関連文献とその現状について効率よく把握できる一助となることを願い、稿を結ぶ。

⁸ 令和 3 年より文部科学省が展開する「国際化促進フォーラム」において、「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の加速と世界展開」(幹事校: 東北大学) がプロジェクトとして採択されており、国内外の高等教育機関への普及が目指されている。

表 1 スコーピングレビューの対象となった文献一覧

No.	著者	タイトル	年	種類	測定場面	対象国	期間	学年	所属	性別	N
1	西谷	留学効果の客観的測定・プログラムの質保証：The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j)	2017	理論	派遣	豪州・米国	2 週間	1 年	全学		19
2	西谷	海外留学体験の効果測定に対する取り組み・海外短期派遣プログラムを中心に・	2018	理論	派遣	N/A	2 週間	1 年	全学		
					派遣		長期				
					受入						
3	永井	BEVI によるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析：「グローバル人材」は育成できるのか？	2018	実践	派遣	カンボジア	1 週間	1 年・修士	総合科学部・文学部・国際協力研究科	F	3
4	永井	BEVI と IDI の比較：その基本的特徴と妥当性に関するエビデンス	2019a	理論				N/A			
5	永井	BEVI の背景理論 (I)：EI モデルにおける「信念」と「価値観」	2019b	理論				N/A			
6	東矢・當間	世界の捉え方にみる学習者の特性とクラス・ダイナミクス：BEVI の結果に基づく分析	2019	実践	専攻	プロファイリングが目的		1-3 年	国際地域創造学部・人文	M	6
									社会科学部・農学部・法	F	14
					科目				文学部・理学部	M	8
7	永井	BEVI の背景理論 (II)：EI モデルにおける「欲求」と「自己」	2020a	理論				N/A	国際地域創造学部・教育学部	F	22
8	永井	BEVI の背景理論 (III)：EI モデルにおける「EI 自己」	2020b	理論				N/A			
9	バイサウス・池田	国際教育実践の学習効果測定の手法の一考察：COIL Plus プログラムにおける BEVI の活用	2020	実践	COIL Plus	6 か国	3 カ月 (COIL 1 か月)				16
10	西谷	BEVI を用いた留学効果の客観的測定：客観的データに基づく留学プログラムの質保証	2020	理論	派遣	N/A	2 週間	1 年	全学		20-30

11	清藤・橋本	BEVI を用いたオンライン留学の効果測定: コロナ禍でのグローバル人材育成の試み	2020	実践	オンライン	米国	4 週間				27
					オンライン	韓国	2 週間				10
					オンライン	台湾	2 週間				7
12	清藤・橋本	オンライン留学参加学生のグローバル・コンピテンシーの傾向分析: BEVI を用いた測定結果に基づいて・	2021	実践	オンライン	プロファアイリリングが目的					41
					オンライン						28
13	河内・植松	BEVI を用いた「超短期留学」の効果と可能性の検討: 大学生の他者理解とジェンダー観の変化に着目して	2021	実践	派遣	フィリピン				M	3
					派遣	米国	25 日			F	4
										M	5
										F	3
14	岩田	本学におけるビジネス系科目受講者への BEVI の実施について	2021	実践	科目	プロファアイリリングが目的		2・4 年	英語学科、日本語日本文化学科、総合文芸学科・都市生活学科・心理学科		58
					科目			3・4 年			41
15	ウィルソン・岩野	国際文化学科の人材に求められる行動特性の考察: BEVI-J と COIL の試行を通して	2021	実践	COIL	米国	4 回+補足	主に 3 年			16
					COIL	米国	8 週間	主に 1 年			15
16	大西	表現系オンライン授業の効果測定: 国際的心理テスト BEVI の導入	2021	実践	科目	N/A	8 週間			M	3
										F	3
17	蒙	オンライン国際交流で見られた学生の変化・成長: オーストラリアのある大学とのショートプログラム	2021	実践	オンライン	豪州	12 日	1・4 年	人文学部・法学部・経済学部・理学部・工学部・創生学部	M	6
										F	6
18	稲盛	短期派遣プログラムの効果測定に関する考察: BEVI を用いた分析から	2021	実践	派遣	アイルランド	4 週間				21
					派遣	シンガポール	1 週間				8
19	植村・和田・田村・徳田	ブルネイダルサラーム大学との連携による COIL 型 Global Classroom の実施と BEVI テストによる学習効果測定の試み	2021	実践	COIL	ブルネイダルサラーム・タイ	7 週間		農学部・医学部・創造工学部		8
20	鈴木	遠隔教育という文脈での英語教育学再考に向けて: オンライン, COIL, BEVI, そして協働	2021	理論				N/A			

	藤島・岩田	キャリア開発学科「フィールドワーク」の展開:BEVI を新たな視点にして	2022	実践	専攻プログラム	プロファイリングが目的		1 年	キャリア開発学科	M	5
										F	131
22	畛田谷	オンライン国際交流教育によるグローバルコンピテンス育成の一考察:タイ王国ブーラー大学とのオンライン国際協働学習の試み	2022	実践	COIL	タイ	3 週間	主に 1 年			23
23	清藤・橋本	学内プログラム融合型のオンライン留学の効果検証: BEVI による課題の可視化を経たグローバル教育の実践	2022	実践	オンライン	米国	4 週間				27
					オンライン	米国	4 週間				21
24	名護・タン・ 當間・東矢	世界展開力強化事業プロジェクト報告: オンライン型短期研修プログラムの取組から得られた学修成果と BEVI 分析による質保証	2022	実践	COIL	米国	15 日				7
					受入 (COIL)	米国					5

表 2 分析された BEVI のスケール

No.	S0	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	経験
1. 西谷																			
2. 西谷																			
3. 永井																			
6. 東矢ほか																			
9. バイサウスほか																			
10. 西谷																			
11. 清藤ほか																			
12. 清藤ほか																			
13. 河内ほか																			
14. 岩田																			
15. ウイルソンほか																			
16. 大西																			
17. 蒙																			
18. 稲盛																			
19. 植村ほか																			
21. 藤島ほか																			
22. 畝田谷																			
23. 清藤ほか																			
24. 名護ほか																			

S0 = 一貫性 Congruency/Consistency; S1 = 人生における負の出来事 Negative Life Events; S2 = 欲求の抑圧 Needs Closure;
 S3 = 欲求の充足 Needs Fulfillment; S4 = アイデンティティの拡散 Identity Diffusion; S5 = 基本的な開放性 Basic Openness
 S6 = 自分に対する確信 Self Certitude; S7 = 基本的な決定論 Basic Determinism; S8 = 社会・情動の理解 Socioemotional Convergence
 S9 = 身体への共鳴 Physical Resonance; S10 = 感情の調整 Emotional Attunement; S11 = 自己認識 Self Awareness;
 S12 = 意味の探求 Meaning Quest; S13 = 宗教的伝統主義 Religious Traditionalism; S14 = ジェンダー的伝統主義 Gender Traditionalism;
 S15 = 社会文化的オープン性 Sociocultural Openness; S16 = 生態との共鳴 Ecological Resonance; S17 = 世界との共鳴 Global Resonance;
 経験 = 経験に対する内省的質問項目 Experiential Reflection Item

参考文献

- Beliefs, Events, and Values Inventory. (2022, September 15). *About the BEVI*. BEVI. <https://thebevi.com/about/>
- バイサウスドン・池田佳子 (2020) .「国際教育実践の学習効果測定の手法の一考察: COIL Plus プログラムにおける BEVI の活用」『関西大学高等教育研究』, 11, pp.131-136.
- Collins, A. (1992). Toward a design science of education. In E. Scanlon, & T. O'Shea (Eds.), *New directions in educational technology* (pp. 15-22), Springer-Verlag, New York.
- 岩田英以子 (2021)「本学におけるビジネス系科目受講者への BEVI の実施について」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』, 2, pp.1-15.
- 稲森岳央 (2021)「短期派遣プログラムの効果測定に関する考察: BEVI を用いた分析から」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』, 6, pp.175-190.
- 藤島淑恵・岩田京子 (2022)「キャリア開発学科「フィールドワーク」の展開: BEVI を新たな視点にして」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』, 54, pp.137-143.
- 河内久実子・植松希世子 (2021)「BEVI を用いた「超短期留学」の効果と可能性の検討 -大学生の他者理解とジェンダー観の変化に着目して-」『ときわの杜論叢』, 8, pp.1-24.
- 清藤隆春・橋本智 (2020)「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定—コロナ禍でのグローバル人材育成の試み—」『徳島大学高等教育研究センター学習支援部門国際教育推進班紀要』, pp.12-21.
- 清藤隆春・橋本智 (2021)「オンライン留学参加学生のグローバル・コンピテンシーの傾向分析: BEVI を用いた測定結果に基づいて」『徳島大学高等教育研究センター学習支援部門国際教育推進班紀要』, pp.11-15.
- 清藤隆春・橋本智 (2022)「学内プログラム融合型のオンライン留学の効果検証: BEVI による課題の可視化を経たグローバル教育の実践」『徳島大学高等教育研究センター学習支援部門国際教育推進班紀要』, pp.52-61.
- 蒙楯 (2012)「オンライン国際交流で見られた学生の変化・成長:オーストラリアのある大学とのショートプログラム」『留学生教育』, 26, pp.101-108.
- Munn, Z., Peters, M.D.J., Stern, C., Tufanaru, C., & Aromataris, E. (2018). Systematic review or scoping review? Guidance for authors when choosing between a systematic or scoping review approach. *BMC Med Res Methodol*, 18, 143.
- 永井敦 (2018)「BEVI によるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析:「グローバル人材」は育成できるのか?」『広島大学留学生教育』第 22 号, pp.38-52.
- 永井敦 (2019a)「BEVI と IDI の比較:その基本的特徴と妥当性に関するエビデンス」『広島大学森戸国際高等教育学院紀要』, 1, pp. 7-14.
- 永井敦 (2019b)「BEVI の背景理論 (I): EI モデルにおける「信念」と「価値観」」『広島大学留学生教育』, 23, pp. 9-19.
- 永井敦 (2020a)「BEVI の背景理論 (II): EI モデルにおける「欲求」と「自己」」『広島大学森戸国際高等教育学院紀要』, 2, pp. 15-24.
- 永井敦 (2020b)「BEVI の背景理論 (III): EI モデルにおける「EI 自己」」『広島大学留学生教育』, 2, pp. 19-31.
- 名護麻美・タンセリーナ・當間千夏・東矢光代 (2022)「世界展開力強化事業プロジェクト報告—オンライン型短期研修プログラムの取組から得られた学修成果と BEVI 分析による質保証—」『琉球大学大学教育センター報』, 24, pp.50-55.
- 西谷元 (2017)「留学効果の客観的測定・プログラムの質保証—The Beliefs, Events, and Values Inventory(BEVI-j)—」『広島大学高等教育研究開発センター高等教育研究叢書』, 137, 45-70.
- 西谷元 (2018)「留学体験の客観的測定—BEVI を用いて—」『大学時報』, 380, pp. 74-79.
- 西谷元 (2020)「BEVI を用いた留学効果の客観的測定—客観的データに基づく留学プログラムの質

- 保証」『広島大学高等教育研究開発センター高等教育研究叢書』, 155, 39-52.
- 沖田勇帆・廣瀬卓哉・長志保・高瀬駿・岸優斗 (2021)「JBI Manual For Evidence Synthesis : Scoping Reviews 2020. スコーピングレビューのための最新版ガイドライン (日本語訳)」『日本臨床作業療法研究』 8(1), pp.37-42.
- 大西好宣 (2021)「表現系オンライン授業の効果測定 : 国際的心理テスト BEVI の導入」『千葉大学人文公共学研究論集』, 43, pp.95-108.
- 東矢光代・當間千夏 (2019)「世界の捉え方にみる学習者の特性とクラス・ダイナミクス: BEVI の結果に基づく分析」『言語文化研究紀要: Scripsimus』, 28, pp.23-45.
- 友利幸之介・澤田辰徳・大野勘太・高橋香代子・沖田勇帆 (2020)「スコーピングレビューのための報告ガイドライン日本語版 PRISMA-ScR」『日本臨床作業療法研究』 7(1), pp.70-76.
- 鈴木 章能 (2021)「遠隔教育という文脈での英語教育学再考に向けて: オンライン, COIL, BEVI, そして協働」『英語英文学論叢 片平』, 56, pp.115-136.
- 鈴木克明・根本淳子 (2013)「教育改善と研究実績の両立を目指して-デザイン研究論文を書こう-」『医療職の能力開発』, 2(1), pp. 45-53.
- 植村友香子・和田健司・田村啓敏・徳田雅明 (2021)「ブルネイダルサラーム大学との連携による COIL (Collaborative Online International Learning) 型 Global Classroom の実施と BEVI (Beliefs, Events, Values Inventory) テストによる学習効果測定の試み」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』, 12, pp.25-38.
- 畝田谷桂子 (2022)「オンライン国際交流教育によるグローバルコンピテンス育成の一考察 : タイ王国プーラパー大学とのオンライン国際協働学習の試み」『鹿児島大学総合教育機構紀要』, 5, pp.100-114.
- Wandschneider, E., Pysarchik, D. T., Sternberger, L. G., Ma, W., Acheson, K., Baltensperger, B., Good, R., Brubaker, B., Baldwin, T., Nishitani, H., Wang, F., Reisweber, J., & Hart, V. (2015). The Forum BEVI Project: Applications and Implications for International, Multicultural, and Transformative Learning. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 25(1), pp.150-228.
- ウィルソンエイミー・岩野雅子 (2021)「国際文化学科の人材に求められる行動特性の考察 : BEVI-J と COIL の試行を通して」『山口県立大学学術情報(国際文化学部紀要)』, 14, pp.65-76.